

た場合にこの部分が増殖したか、或いは質的に変化したものと思われます。

質問 (茨城・石渡産婦人科病院) 石渡 勇

体内膜腺癌細胞を *in vitro* で継代するにつれ、未分化の方向へ向うと言われているが、先生の *nude mouse* 増殖実験では分化型腫瘍を形成したということですが、継代している最近のでも分化型腺癌になるのでしょうか。

追加

我々も30例の腺癌初代培養から8株をしましたが、*nude mouse* に形成される腫瘍は全部未分化型です。cell line も初代培養細胞を移植すると一部のものに分化型腺癌によるものがあり、*in vitro* で細胞の性格がかわるものと考えられます。

回答 (筑波大) 西田 正人

① ごく最近の細胞を用いて、ヌードマウスへの移植実験は行っておりません。しかし *in vitro* の細胞形態は初代培養時と変っておらず、分化型の性格を保っていると思います。

173. 子宮体癌における後期胎盤型 Alkaline Phosphatase の生化学的研究

(慶応大)

新井 宏治, 野沢 志朗, 塚崎 克己

太田 博明, 筒井 章夫, 栗原 操寿

ツォクロ・ウイジャヤ

目的: Alkaline Phosphatase は membrane bound protein であり、胎盤性蛋白の中でも特殊な地位を占めている。ALP は数種の isoenzyme から成り、それぞれ由来組織や生化学的性質が異なっている。その中でも癌に出現する耐熱性後期胎盤型 ALP は、Regan あるいは Nagao isoenzyme と呼ばれ oncodevelopmental protein の 1 つとして臨床的にも悪性腫瘍の診断に応用されつつある。今回我々は、生化学的に正常子宮体内膜および子宮体癌における ALP isoenzyme pattern を、この後期胎盤型 ALP を中心に比較検討した。

方法: 材料には、正常子宮体内膜21例、子宮体癌11例を用い、いずれも手術例より採取した。ALP は、組織より butanol 抽出し、para-nitro phenylphosphate を用いた Fishman 法により測定した。又、その isoenzyme pattern は、65°C 熱阻害試験と、L-phenylalanine (L-P), L-homoarginine (L-H), L-leucine (L-L) の各種アミノ酸阻害試験を行つた後、分光光度計により測定した。また cellulose acetate membrane を支持体と

した電気泳動法により易動度を調べた。

結果: ① 正常子宮体内膜 ALP は、熱、L-H 感受性で L-P 非感受性の肝型 ALP であった。② 既に、我々が組織化学的に発表してきた様に、正常子宮体内膜にもきわめて微量ではあるが、生化学的にも、耐熱性、L-P 感受性、L-H 感受性弱の後期胎盤型 ALP を確認できた。③ 又、一方、子宮体癌 ALP も全体としては肝型 ALP であった。④ しかし、子宮体癌では、正常子宮体内膜に比べ、後期胎盤型 ALP は、より高濃度に出現した。⑤ 又、子宮体癌では正常子宮体内膜には認められなかつた耐熱性で L-L 感受性の強い典型的な Nagao isoenzyme が認められた。

以上より、子宮体内膜では、癌化に伴い、耐熱性である後期胎盤型 ALP が、より高濃度に出現し、さらに正常には認められなかつた典型的な Nagao isoenzyme も出現してくることがわかつた。

質問 (関西医大) 樫木 勇

正常子宮体内膜にも証明された耐熱性 ALP を持つような上皮細胞が、後に癌化する可能性があるとは考えられないか。

回答 (慶応大) 野沢 志朗

体癌における耐熱性 Alkaline phosphatase の出現に関しては① 耐熱性 ALP をもつ被覆上皮より体癌が生ずる可能性と② 耐熱性 ALP を持たない体内膜腺が腫瘍化することにより、Oncodevelopmental protein である同酵素を有するに致つたと考える二つの可能性があると思います。

174. 子宮体癌の組織発生について

(愛媛・国立病院四国がんセンター)

正岡 尚, 日浅 毅

富岡 尚徳, 千葉 丈

研究目的: 子宮体癌の組織発生的一端を解明するために、前癌性病変を体癌および非体癌剔出子宮内膜で検索し、内膜病変と年齢的因子の関係をみた。また体癌の組織発生が、内膜被蓋上皮由来と内膜腺上皮由来の二種であると推測し、両者の発生因子の相違を検討した。

方法: 当院で剔出した非体癌子宮内膜2,440例と体癌非癌部内膜79例について、嚢胞性病変、腺腫・ポリープ様増殖、異形増殖等の出現頻度と年齢との関係をみた。また体癌88例を比較的初期病変部の進展・増殖型や組織型、さらに粘液染色態度などをもとに、被蓋上皮由来と内膜腺上皮由来と大別し、各症例について年齢、閉経、妊娠分娩回数、高血圧、肥満、癌素因、重